

近江八景：概要

「近江八景」は、近江国（1871年より前の滋賀県の名称）における8つの優れた景観を指し、数々の詩や絵画で描かれてきました。この地域は自然が美しいと昔から有名で、芸術家や巡礼者、貴族など、幅広い人々を魅了してきました。江戸時代（1603～1867年）に京都（当時の首都）に向かう途中、多くの人々が近江を通ったことで、この地域は芸術作品の有名なモチーフになっていました。

近江八景の起源については諸説ありますが、17世紀初頭に一連の詩で八景を描いた近衛信尹（1565～1614年）により確立されたと一般的に認められています。それ以前は、日本の芸術家や作家、禅僧たちは、中国の芸術家・宋迪（1015～1080年）が最初に描いた瀟湘八景図の影響を受けていました。日本の芸術家たちは、日本の様々な地域の美しさを表現するために、八景のモチーフを採用しました。

17世紀後半には、近江八景が扇子やふすま、扉、陶磁器に描かれるようになっていました。鈴木春信（1725～1770年）や葛飾北斎（1760～1849年）など、多くの木版画家が八景の錦絵を制作しました。おそらく、このモチーフと最も関連性が深い芸術家は、近江八景の連作として約20種の作品を創作したことで知られる歌川広重（1797～1858年）です。

近江八景は、瀟湘八景を忠実に翻案したものであり、水上の満月や、夜の雨、雁など、基本的な光景の多くが共通していますが、舞台は琵琶湖やその周辺に移し替えられています。石山寺、瀬田の唐橋、浮御堂、比良山地、三井寺など、大津の歴史的な場所の多くが近江八景に含まれています。八景はいずれも、現在でも訪れることができます。